

令和7年度 第2回倉吉市青少年問題対策協議会

倉吉市小中学生の生徒指導上の実態等について説明及び協議を行いました。

【日 時】 令和8年3月6日（金）10時00分～11時30分

【場 所】 倉吉市役所北庁舎3階A会議室

【内 容】

1 開 会

（1）開会あいさつ

2 説明及び協議

（1）倉吉市小中学校の生徒指導上の実態の概要について（SNSトラブルに関する内容について）

（2）倉吉市小中学校の長期欠席等の実態及び未然防止等不登校対策について

3 主な意見

（1）倉吉市小中学校の生徒指導上の実態の概要について（SNSトラブルに関する内容について）

- ・ SNSトラブルについては、令和6年以前はそのほかの中に分類されていたが、令和5年度以前の中にSNSに係る案件はあるか。⇒ 案件は複数ある。
- ・ 中学生はほぼスマートフォンを持っている。持たないという指導ではなく、PTA総会、学年懇談などで取り扱いについて話をしている。保護者の認識と子どもの認識に乖離があると感じる。保護者が思ってもいないような使い方を子どもがしている実態もある。学校として、年度初めに情報モラルに関する学習を実施しているが、問題は起きてしまう現状がある。保護者の協力は不可欠だと考える。
- ・ SNS問題を解決する方法として、持たせないという方法はある。取り扱いという中で考えると、個人情報流すということがどれほど影響を及ぼすものか学ぶ必要がある。
- ・ 学校としては、警察等とも連携して学習を実施している。
- ・ 小学校も基本的に所持率は高いと考える。子ども自身の持ち物としてではなく、保護者のものを自由に使える状況がある。子どもが何に使用しているか、いつまで使用しているか、それに対して保護者はどう関わるか。子どもにとっては魅力的なものである。特に低学年にとって、静かに良い子でいてもらうツールとしての捉えがあると感じる。
- ・ 通信機能のあるゲームを子どもたちは所有している。広範囲の人間関係の中で、時間を忘れて没頭する。ゲームによって年齢制限があることへの認識が薄い方もある。暴力的なものや人を傷つけるような内容もある中で、道徳的な視点でも心配している。
- ・ 家庭の中で状況を把握しておらず、学校としても内容をつかみにくい。つかんだ時には、問題が大事になっている。ゲームでは、課金の問題もあり、金銭が絡む問題にも発展することもある。多岐に渡る内容に対応しなければならない。
- ・ 県民会議でもSNSトラブルについて話題になる。数年前から「とりのからあげ」という用語が使われており、うちわなどグッズがある。県民会議にも相談してもらえればよいと思う。市社会教育課に相談すれば、つなげてもらえる。
- ・ モラルの専門家などと連携し、子どもに意識が及んでくれるとよいと考える。
- ・ SNSトラブルは学校では見えないこともあり、どれだけ取り上げられているかという視点で考えると、実際に生徒指導の項目となることで、トラブルの現状が見えることにつながっている。
- ・ 件数以上にSNSトラブルは起きていると考える。クロームブックの使用方法など、子どもは抜け道を探しながら使っている状態である。子どもたちに先生が追いついていない状況がある。高校であると、位置情報の共有を同級生で行ってトラブルになる例がある。インスタグラムやティックトックに勝手に画像をあげていじめになったり、SNSトラブルになったりする事案がある。
- ・ 心理教育の1つとして、カウンセラーも関われるのではないかと考える。SNSではうまく気持ちなどが伝わらない部分もあるという点について。

- ・ SNS トラブルに関わっている子は、不登校などの状況はどうか。
- ・ SNS トラブルへの対応としては、まずは保護者が対処し、その後、学校が対応。子ども同士が話をするなどして、うまくいくときもうまくいかない時もある。その時に学校生活に影響する。今年度、グループラインからの脱退についてお便りを出した学校がある。保護者からありがたいという声があった。学校も困っているが、保護者自身も解決方法が分からなくて困っている方がある。
- ・ 倉吉人権擁護委員協議会でもいじめのことが話題にあがっている。チャットでの相談が多くある。タブレットから相談できる方法もよいのではないか。
- ・ 児童相談所においても、ネットに関わる事案がある。インターネットで仕入れた情報がもとになって発生している。保護者が知らないところで、子どもが情報をキャッチしている。気づいていない家庭があり、事が起こってから連絡が入ることがある。
- ・ 顔の见えないところとつながる SNS の影響を心配する。学校生活リズムや心身へ影響もあるのではと思う。

(2) 倉吉市小中学校の長期欠席等の実態及び未然防止等不登校対策について

- ・ 愛知県ではスマートフォンの使用時間に関する条例がある。
- ・ 夜遅くまでスマートフォンを使っている生徒はいる。12 時を超えるまでスマホを使っていたということを子どもから聞くこともある。好事例として、去年欠席日数が 30 日以上だった子が今年不登校ではない子もいる。学校の中でいきいきできるものが自分の中で見いだせた時に、スマホなんか触っている場合ではないというやる気が湧いてくる子もいる。
- ・ 教育相談をしながら、少しでも子どもの思いを聞きながら、教員が指導ではなく聞くという対応をしている中で、不登校児童生徒数が昨年より減少した。また、生徒支援委員会に、SC、SSW r にも入ってもらって、情報共有の時間ではなく、1 人のアセスメントをしながら、いつどこで誰がどう関わるのかまで話をしている。また、授業の中で、わかった、できた、褒めてもらったら明日も学校来ようかなと思うと思う。その積み重ねも大事な部分ではないかと考える。
- ・ 使用制限ではなく、それ以上に魅力がある、学校への楽しみや安心感が大切。
- ・ 欠席日数 30 日～39 日のあたりはなんとかできるかもしれないが、本当に長期になるとなかなか学校は入り込めない。
- ・ ひとりひとりを大切にしたい人権教育の充実にも学校は力を入れている。
- ・ 校内サポート教室の様子について知りたい。
- ・ 実際の状況として、子どもたちは学校に来れたり来れなかったり、来た場合に安心して過ごせる場所があるようにという実態を受け入れる中で、学級ではなくサポート教室がよいという判断をする中で、保護者も学校で生活できるようにしてほしいという思いがあるのであれば、そういった場所を学校につくることはできないだろうかという考え。フリースクールや中部子ども支援センターなど学校以外の学びの場所もあるが、身近で信頼関係の築きやすい大人がいる場所を学校につくって、そして、最終的に状況の変容を促していくことはできないかということでの設置である。子どもが、その場に自分のやりたいことを自分のルールでという所までは設けていない。必ず大人がいること。好き勝手にわがままにできる場でもない。基本的には、学校は学びを得に来る場所なので、目的意識をもって、時間や方法について考えていくという方向で進めている。今年度 2 学期からさらに取り組んでいることは、1 日の過ごし方について計画を立てて、振り返りを行って、達成感をもって帰ってもらうようにしている。
(特に高学年について) 同じ校区の中中学校でもそのような取組をしており、同じねらいをもった取組を小中でやることで、子どもの育ちを支えることができると考える。利用している子どもが特別な存在で教室にいて当たり前で生活できている子がそうではないという認識を他の子どもが持たないようにすることについて、心を砕いている。
- ・ 子どもたちの主体性に目を向けながら、取組を進めておられる。
- ・ 小中連携という視点から小、中、高校、大学と子どもは育っていくことを改めて感じる。